

# 患者調査から考える子どもの事故・けがの実態

内山有子・日本女子体育大学スポーツ健康学科 専任講師

## はじめに

現在、日本で子どもの事故やけがについての資料を得ようと試みると、厚生労働省が毎年発表している「人口動態統計」や、独立行政法人日本スポーツ振興センターの災害給付金制度に基づく「学校管理下の災害統計」「死亡障害事例集」、総務省消防庁による「救急・救助の現状」「消防白書」、国民生活センターの「消費生活相談情報」などがみつかると思います。

しかし、人口動態統計では事故やけがによる子どもの死亡数や死亡率などを把握することはできませんが、死亡に至らなくとも事故やけがで入院や通院したケースを把握することはむずかしく、また「学校管理下の災害統計」や「死亡障害事例集」では就学未満の子どもたち（保育園児・幼稚園児もこの制度の加入対象なのですが、すべての子どもが保育園や幼稚園に就園しているわけではないので）の事故やけがの資料を得ることがむずかしいとされています。「救急・救助の現状」や「消防白書」では119番通報して救急車を利用し、病院へ搬送されたケースに関しての資料を得ることはできませんが、自家用車やタクシーなどを利用して病院に行ったケースを把握することができません。「消費生活相談情報」では国民生活センターに実際に寄せられた情報をもとに、安全性の検討や危険性の啓発などを行っ

ていますが、ある程度の数の症例を把握してからでなければ行動に移しにくいという現状があります。

これらの統計はもちろん、それぞれとても有意義であり、それぞれの統計の意図をくみ取りながら利用することにより子どもの事故やけがを考える一助になることは広く認識されていますが、今回はこれらの資料以外で子どもの事故やけがの現状を知る資料として、厚生労働省が3年ごとに発表している「患者調査」という統計をもとに考えてみたいと思います。

## 患者調査とは

患者調査とは、病気やけがなどで病院や診療所を利用する患者の傷病状況等の実態を明らかにし、医療行政の基礎資料を得ることを目的とし1955（昭和30）年より3年ごとに実施されている調査です。調査年の10月に医療施設ごとに1日の患者の性別、住所、入院・外来の種別、受療状況などについて調査します。また、退院患者については、調査年の9月1～30日までの1カ月間に退院した患者について調べます。

傷病の分類は世界保健機関（WHO）の「国際疾病、傷害および死因統計分類（ICD）」に基づき分類され、1996（平成8）年以降の調査ではICD-10を用いて調査しています。そのなかで事故やけがに関する統計は「XIX章 損傷、中毒およびその他の外因の影響」という分類

に入ります。

人口動態統計を用いて事故やけがを調べるときは、おもにICD-10の「XX章 傷病および死亡の外因」からその死亡数や死亡率、死亡順位などをみますが、患者調査では生存者を対象にしていますので「XX章 傷病および死亡の外因」という調査項目がありません。よって「XIX章 損傷、中毒およびその他の外因の影響」から調べるのが妥当かと思われる。

## 傷病分類別にみた推計患者数

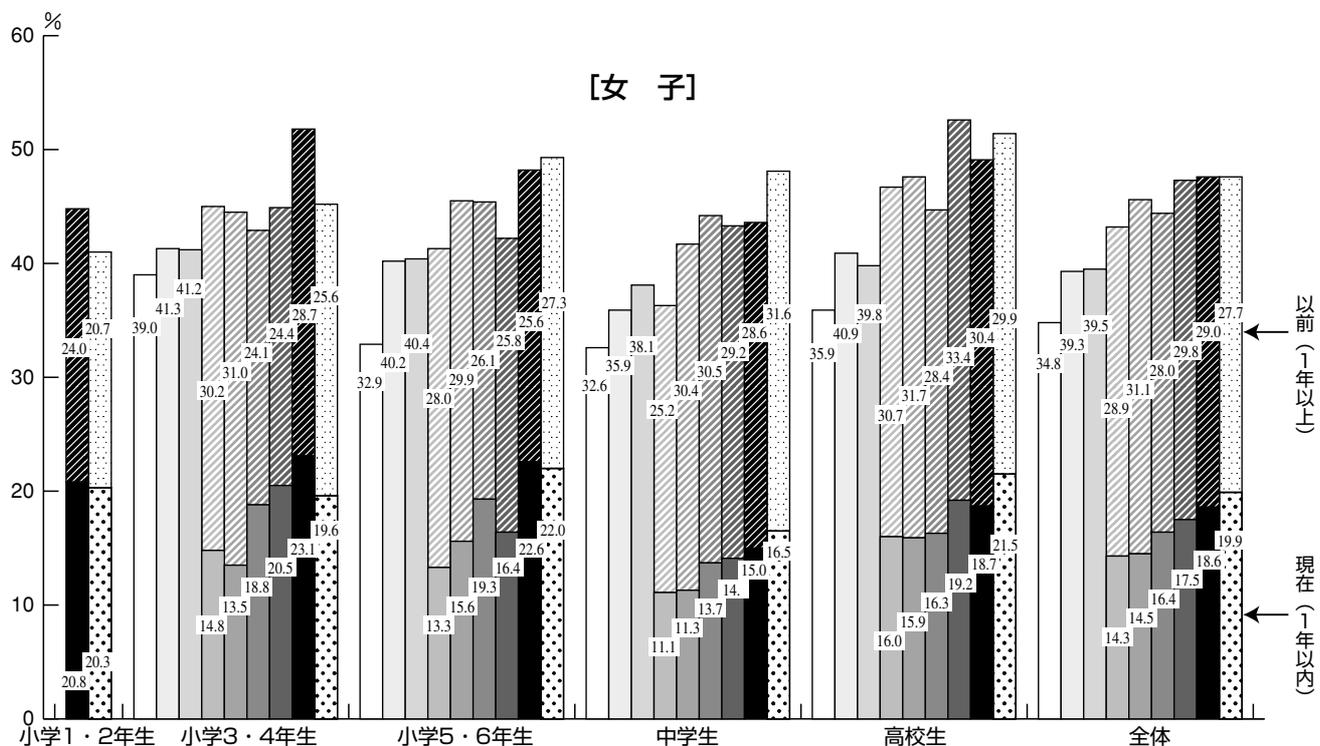
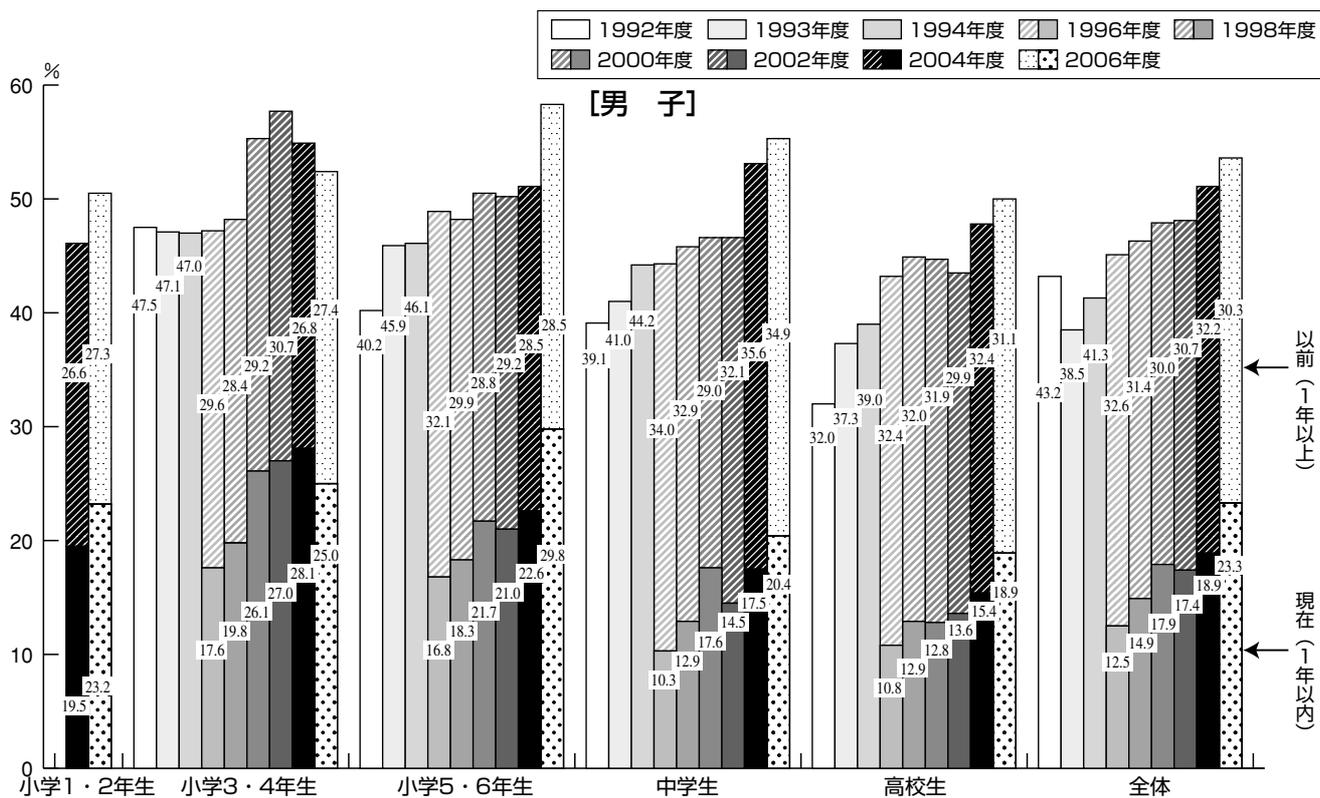
2005（平成17）年の患者調査によると、調査日当日に病院一般診療所、歯科診療所を訪れ受診した患者について、傷病分類別に入院と外来を合わせた推計患者数（千人単位）、受療率（推計患者数を人口で割って人口10万対であらわした数）、構成割合（傷病分類の総推計患者数における割合）をみてみると、全年齢階級の総数で8,555.2千人（受療率6,696人）が病院を受診し、その理由は「消化器系の疾患」が最も多くなっています。0歳では77.6千人（受療率7,315人）、1～4歳では303.0千人（受療率6,678人）、5～9歳では246.5千人（受療率4,143人）、10～14歳では150.9千人（受療率2,500人）が病院を受診し、その理由はいずれの年齢階級も「呼吸器系の疾患」が最も多く、15～19歳では134.6千人（受療率2,042人）が受診し、その理由は「消化器系の疾患」が最も多くなっています。

そのなかで損傷や中毒などの事故やけがで受診した人は総数で426.4

# 13 アレルギー

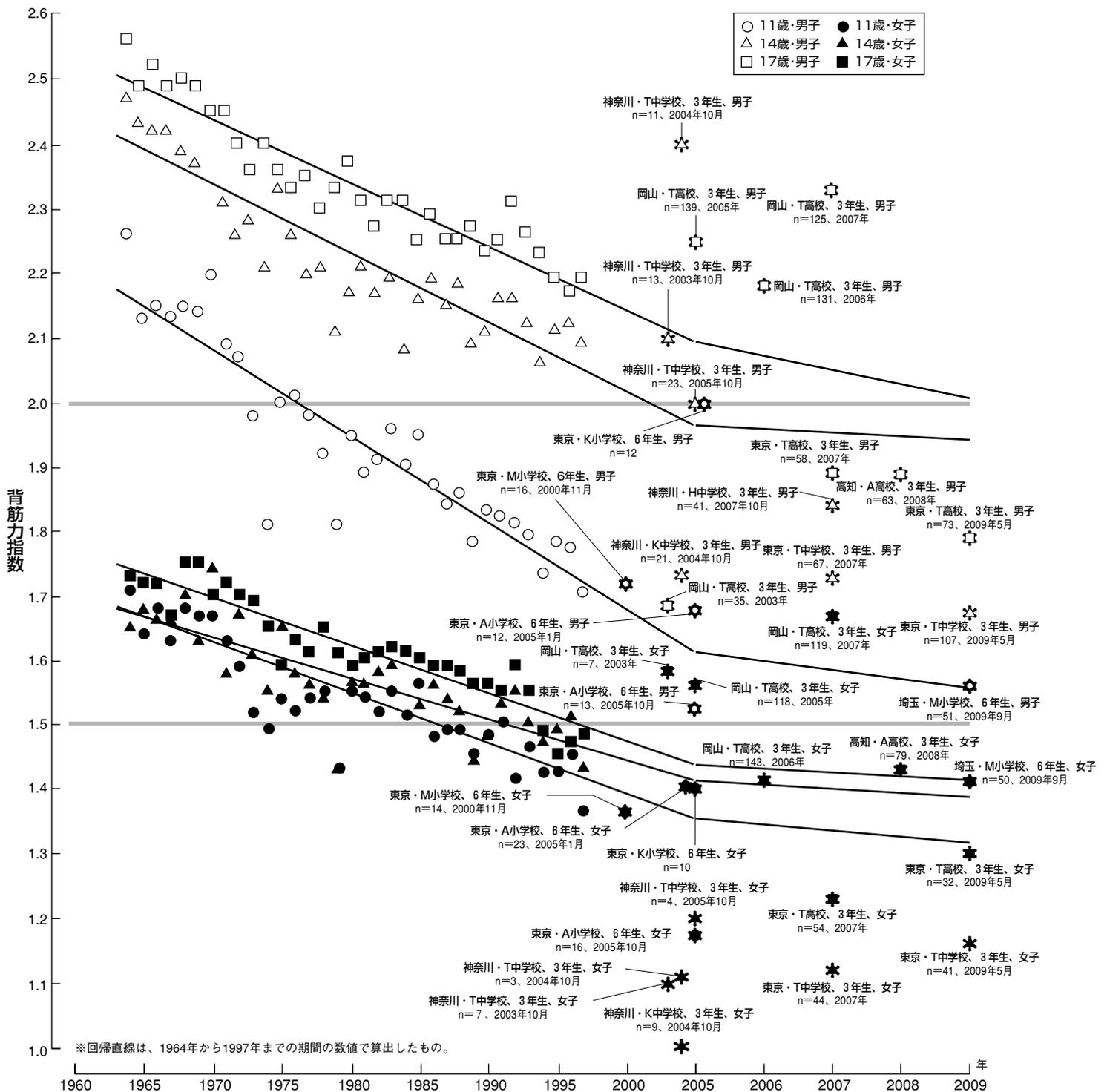
Allergy symptoms

保  
護



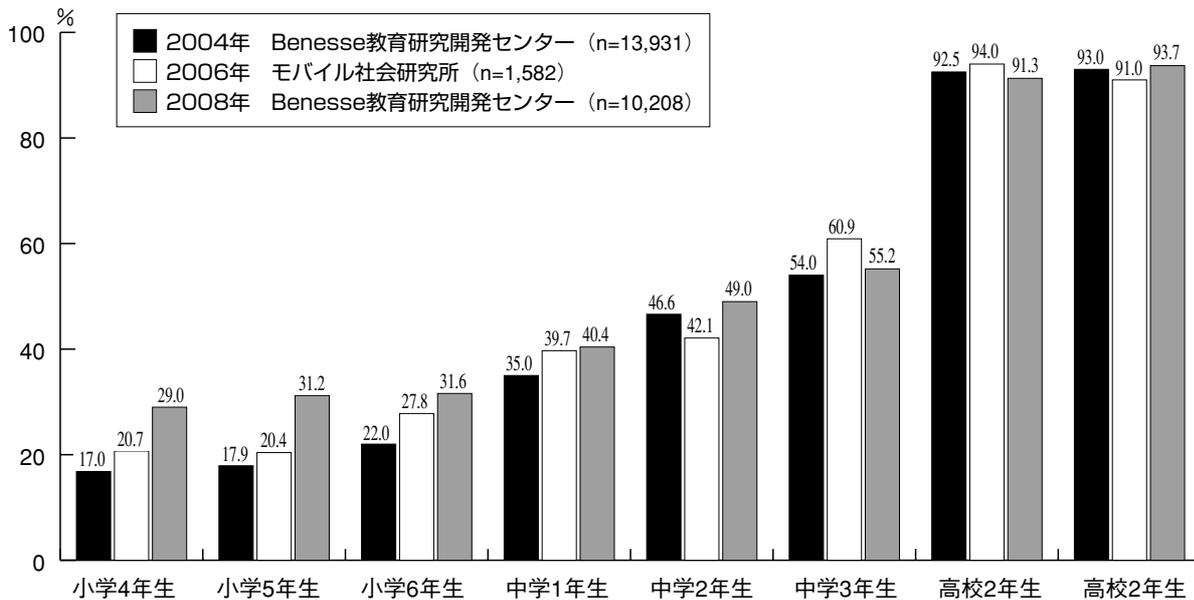
▲ 13-1：アレルギーの経年変化——現在（1年以内）、以前（1年以上前）、  
医師からアレルギーと言われた者の割合（男女別）  
（日本学校保健会『児童生徒の健康状態サーベイランス事業報告』より）

2年に1度出される「児童・生徒の健康状態サーベイランス事業」で学校区分によりアレルギーの全体的様相をみています。今年度からアレルギーの内容も東京都のデータをもとにみることにしました。



いずれの年齢の男女とも、調査開始当初より一貫して低下傾向を示しています。われわれは、高校卒業時の到達目標として男子2.0、女子1.5を提案しています。ところが、「新体力テスト」の測定項目では“背筋力”が削除されてしまいました。したがって、各地での測定結果をこの『白書』に集約し、せめてその低下傾向に歯止めがかかるまでは“背筋力指数”の推移を観察したいと考えています。

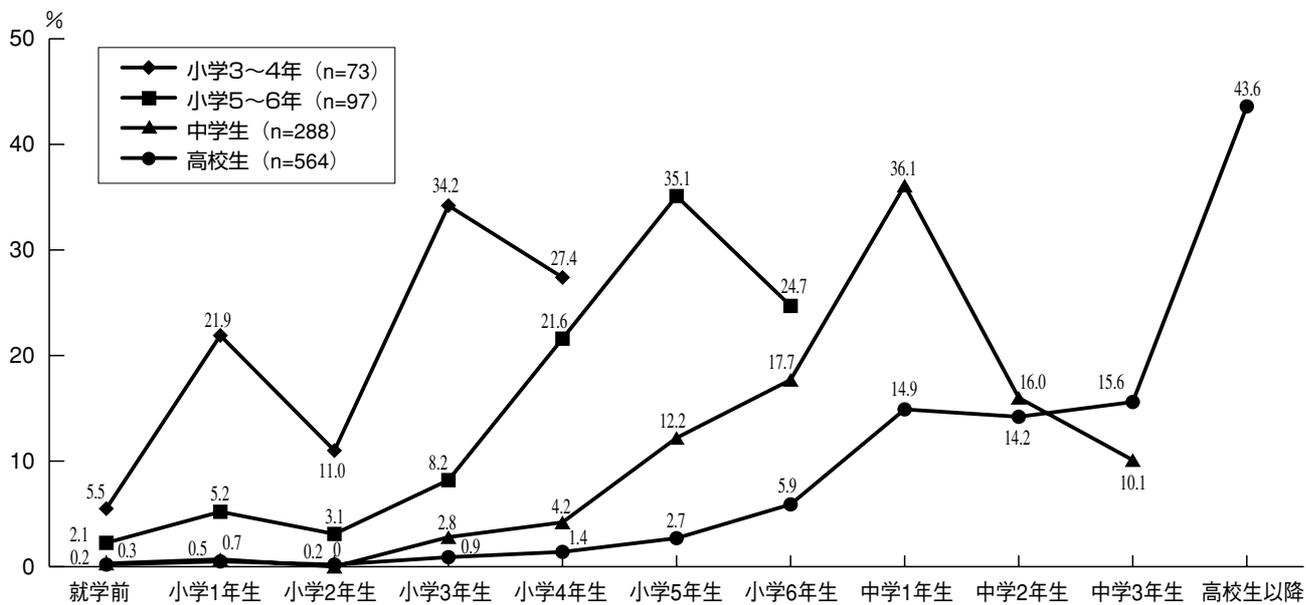
▲2-6：スポーツテストにおける11・14・17歳の背筋力指数（背筋力／体重）の年次推移  
 （文部省（97年当時）『体力・運動能力調査報告書』より）



### ▲ 2-5：携帯電話所持率

(Benesse 教育研究開発センター『第1回子ども生活実態基本調査』、『子どものIC利用実態調査報告書』、モバイル社会研究所『モバイル社会白書2007』より)

携帯電話の所持率は、学年が上がるにつれて、次第に高くなり、小学生で25%前後、中学生では40～60%、高校生になると90%以上となっています。



### ▲ 2-6：携帯電話を持ちはじめた時期

(モバイル社会研究所『モバイル社会白書2007』より)

全体的に、携帯を持ち始める時期が低年齢化している様子を観察することができます。小学校3・4年生では、すでに就学前に5.5%の子どもが携帯電話を所持しています。また、小・中・高校への入学時に所持率が増加する傾向にあることもわかります。

# 『子どもの“からだ”と“心”の接点を探ろう！』

小泉英明

日立製作所 役員・日立フェロー

「からだ」だけを研究する、あるいは、「心」だけを研究するというのであれば、従来からそれぞれの分野で進められていますが、この二つを結ぶ「接点」についての研究は非常にむずかしいものです。そういう意味では、一番最先端であり、考え方を新しくしなければ「接点」を理解することはできません。本日は、このからだと心とをつなぐ「接点」ということについて話をしてみたいと思います。

## 人間の先祖

最初に「人間とは何か」ということについてお話しします。スライド1には、人間とチンパンジーの相違点を示しました。まず人間は、階層的な文法による言語を活用し、道具を使用します。時には道具を作るための道具も作ります。それから人間が行う

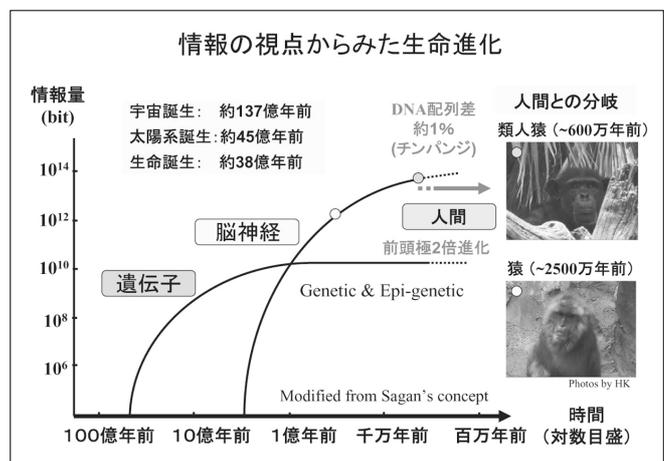
「積極的な教育」というのは、チンパンジではまだ発見されておらず、いまのところ人間特有のものと言えそうです。また、「慈愛（コンパッション）・憎悪」といった高次な感情を持っていることも人間の特徴ですが、これについてはほとんど研究されていません。

中国で「人間」を表す場合、「間」という字が抜けて、「人」になります。私は、中国の方に「人間という中国語はないのですか？」と質問してみました。「人間」という言葉はあるそうですが、中国語では「社会」という意味を表すそうです。「人間」は、人と人との関わりや社会のなかで生きていく。つまり、私たち人間は生まれたときから、他の人との関わりや社会のなかで生きているのです。人間とはいいものだなと思います。

### 人間とチンパンジの相違点

人間	(人間: コミュニケーション)
	階層的な文法による言語能力を有する 複雑な道具を製作し、使用する 積極的な教育を行う 慈愛・憎悪など高次の感情を持つ
チンパンジ	
	階層的な文法を持ってない(単語の羅列に近い) 極単純な道具(木の実割りの石器など) 積極的な教育は皆無(模倣止まり) 新生児微笑などの原始反射は同等

スライド1



スライド2